

研究テーマ	甲州印伝への山梨県産鹿革の活用とプロダクトの試作開発 (H27~H28)
研究者名 (所属名)	串田賢一・鈴木文晃・佐藤博紀 (山梨県工業技術センター) 小平真佐夫 (山梨県富士山科学研究所)

### 【背景・目的】

近年、個体数が著しく増加しているニホンジカによる森林・農業被害が深刻化する中、山梨県では、被害低減に向け山梨県第二種特定鳥獣管理計画に基づき個体数調整に取り組んでいる。

捕獲されたニホンジカのほとんどは廃棄処分されており、食用として流通しているわずかな量のニホンジカについても、食肉加工の残渣となる皮は廃棄処分されているのが現状である。このニホンジカの皮を有効活用するためには、より付加価値の高い製品開発を行い、事例やエビデンスづくりを推進していく必要がある。

本研究は、本県ニホンジカ由来の革を甲州印伝の素材として利用するための取組を行い、森林・農業被害の問題と伝統工芸振興を結びつける中で新たな価値づくりに資することを目的として実施した。

### 【研究・成果等】

#### 1. 鹿革の調製

昨年度得られた白色のなめし革の表面を印伝加工に適したものとするよう調製に取り組んだ。銀面、皮裏それぞれの方向から削り込んだ後、撥水加工〜印伝加工を施して仕上がりと比較した。その結果、銀面層を利用した加工が良好な結果を得られることが分かった。

その後、小物類用には縫製のし易さの観点から仕上がりの厚みを 0.8mm 厚に、バッグ等の大型のアイテム用には量感と強度を確保する観点から 1.2mm 厚に設定して仕上げを行った。

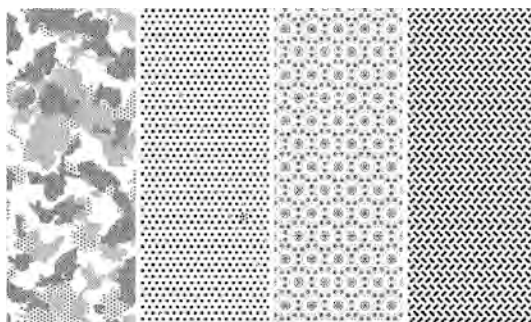


図1 新たに開発した印伝加工用の新柄(抜粋)

#### 2. 印伝文様の新規開発

本研究中で企画・製作する印伝製品に使用するための新柄の開発に取り組んだ。スクリーン印刷版を簡易型紙として用い、施漆による仕上がりを確認しながらドット等の間隔や大きさなどの調整を行い、7柄を完成させた。(図1)



図2 新規開発した名刺ケースと長財布

#### 3. 印伝製品の新規開発

早期の市場投入を意識した定番商品、従来とは異なるターゲットへのアプローチを意識した新奇商品の二つを念頭に、次のラインナップにより試作品をデザイン〜製作した。(図2)

- ①名刺ケース ②長財布 ③大型トートバッグ  
④縦型トートバッグ ⑤富士山型ポーチ

#### 4. 市場性評価の実施

試作品のうち名刺ケース、長財布を「第83回東京インターナショナルギフトショー (@東京ビッグサイト)」に出展し、バイヤーやセレクトショップ購買担当者等の受容性評価を行った。その結果、コンセプト、仕上がりともに高い評価を得ることが出来た。(図3)



図3 ギフトショー出展の様子

### 5. テレメトリー調査の実施と考察

将来的な原皮の安定供給に向け、試験的に富士山北斜面（山梨県側、主に富士吉田市、鳴沢村、山中湖村、忍野村、富士河口湖町）に生息するシカの生態情報調査を電波追跡調査（テレメトリー調査）により行った。箱ワナにより捕獲した4頭のニホンジカのうち幼獣にVHF発信機、成獣3頭にGPS発信機を取り付け、最長で100日程度の追跡調査を行った。（図4）（図5）

その結果、同地域内での鹿の生息状況がある程度推察することができた。



図4 山中湖付近の2頭の鹿の位置データ  
(県境の三国山を越えての移動が確認された)

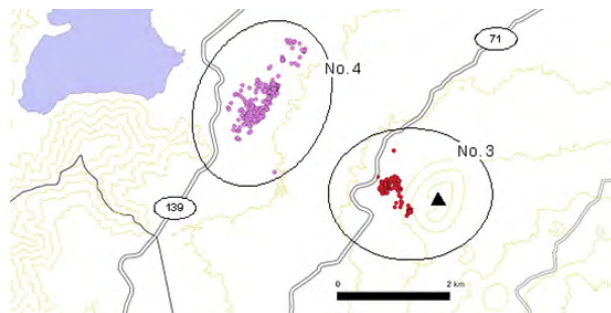


図5 本栖湖付近～青木ヶ原の2頭の鹿の位置データ  
(県境を越えての移動が確認された)

### 6. 冊子「鹿の有効利用」の作成

ニホンジカの肉や皮を有効利用するために必要なポイントについて、イラストや写真を含めて冊子の体裁にまとめた。様々な情報端末での閲覧や印刷利用を意識し、冊子データをPDFファイルにて取りまとめた。（図6）

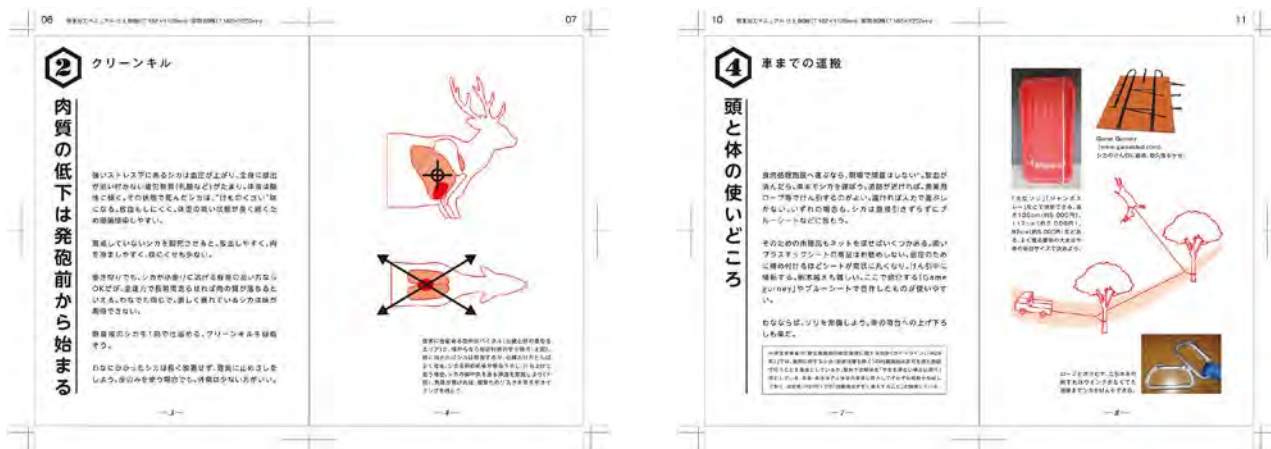


図6 冊子「鹿の有効利用」の誌面（一部抜粋）  
(体裁：（見開き B5 判横（182mm×257mm）／フルカラー／24 p）)

### 【成果の応用範囲・留意点】

- 作製した鹿革については、印伝加工用としては、まだ表面改質の余地がある。
- 県産鹿革を用いた印伝製品に対するバイヤー等の反応は良好であり、一定の市場性が見込めると判断できる。
- ニホンジカの有効利用のためには、需給バランスを維持することが重要であり、捕獲～製品化～市場投入といった一連のビジネスネットワークの構築が必要である。

### 【問い合わせ先】

所 属	山梨県工業技術センター	
代表者	主任研究員 串田 賢一	E-mail: kushida-wkp@pref.yamanashi.lg.jp